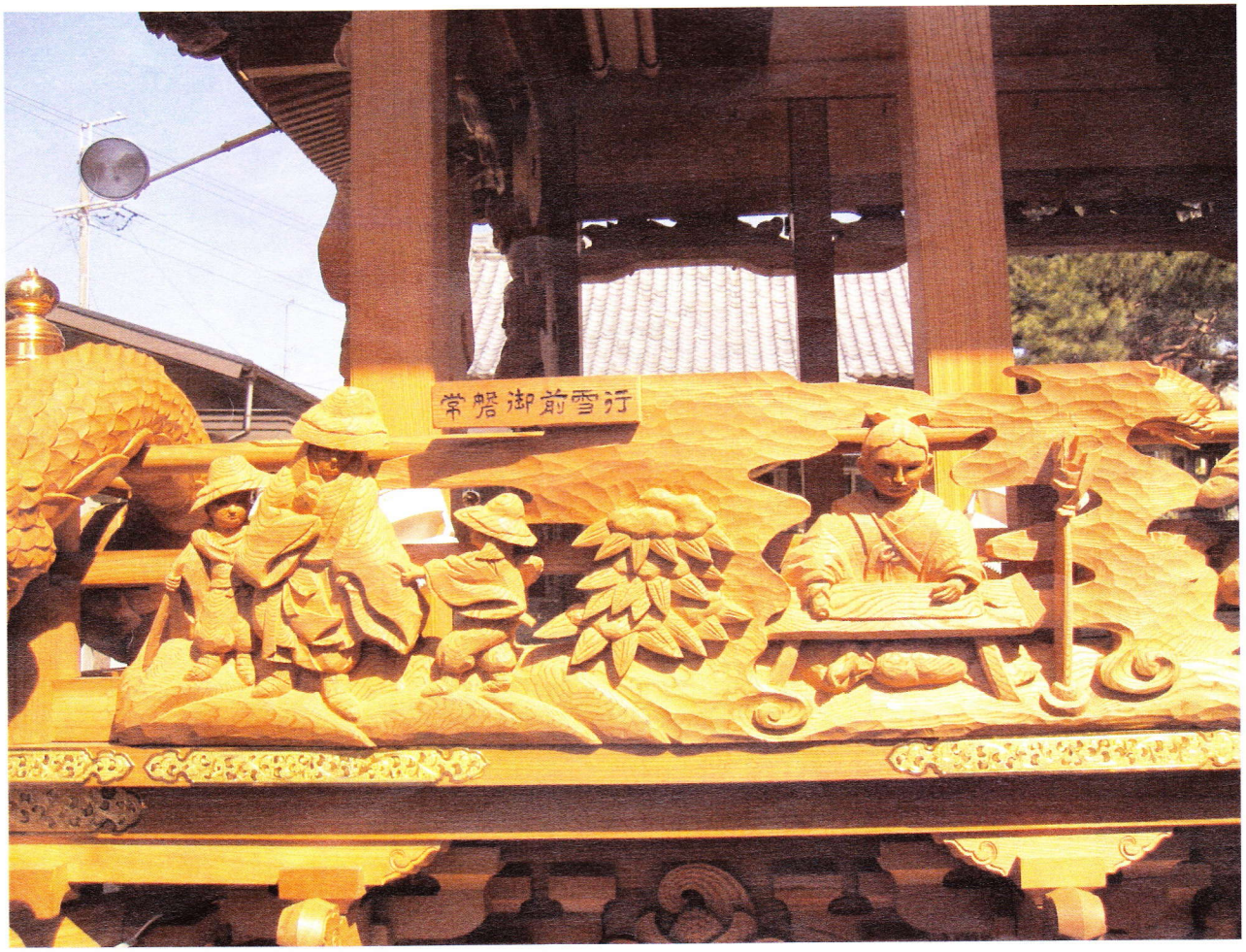
泉町屋台彫り物紹介

泉屋台管理委員会

中村化成工業
萩丘幼稚園

常盤御前雪行

牛若丸（のちの 源 義経）は常盤御前の三人目の男子として京で生まれた。父 源 義朝は平家との戦い（平治ノ乱）に敗れ、常盤御前は幼い今若と乙若の手を引き、生まれてまもない牛若丸を胸に抱いて大和ノ国（奈良県）に逃れる。



鞍馬の牛若丸

牛若丸が七歳に成った時、平　清盛の仕打ちを恐れた常盤御前は、牛若丸を鞍馬山の寺に預ける事にしました。

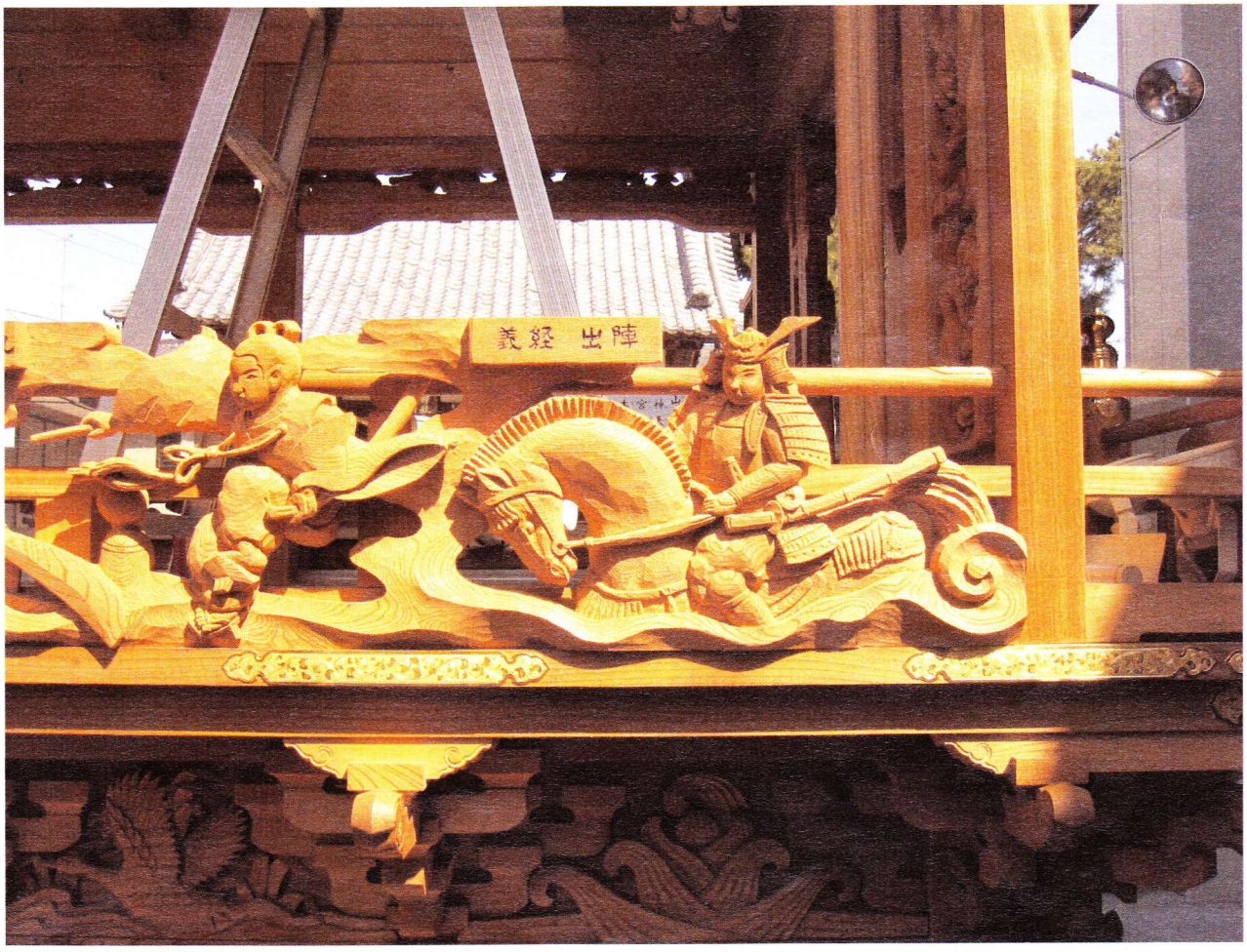
鞍馬山に入った牛若丸は、昼間は学問に励み夜になれば貴船明神の守り神である大天狗、その手下の小天狗、烏天狗と武道の稽古に励むのでした。

弁慶と牛若丸

心身共に成長した牛若丸は、鞍馬山を出て奥州藤原秀衡（ひでひら）の館に身を寄せる事にします。その時牛若丸は、京の五条橋に鬼のような大入道が現れ、通りがかりの人の刀をうばい取ると云う話を耳にします。牛若丸は、大入道武蔵坊弁慶と戦い見事に打ちまかし、そして弁慶は牛若丸の家来となりました。

義 経 出 陣

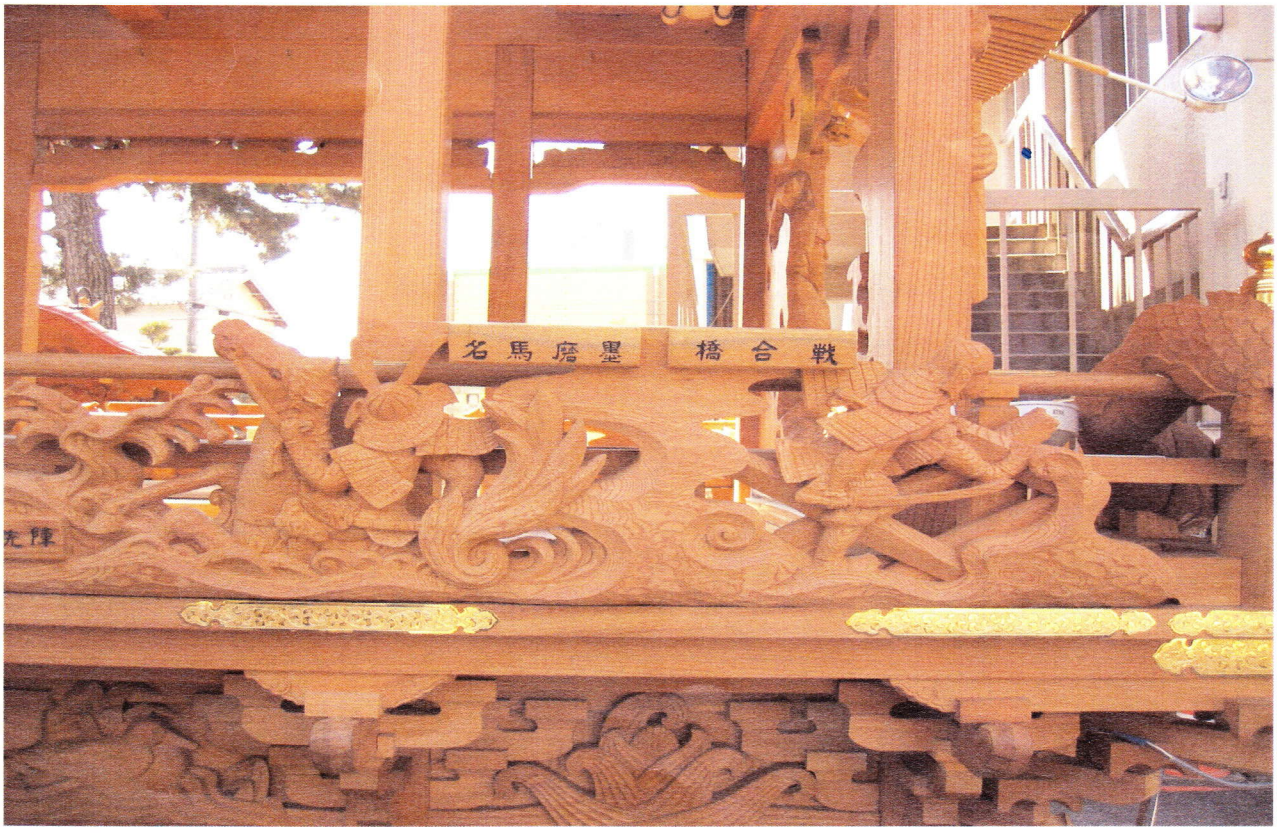
十六歳の牛若丸は、鞍馬をあとに奥州平泉に旅立ちます。途中元服した牛若丸は、名前を源九郎義経と改めます。兄、源　頼朝が承兵したのはそれから八年後の八月の事でした。義経は奥州より三百騎を率いて兄、頼朝の所に駆けつけます。



橋 合 戦

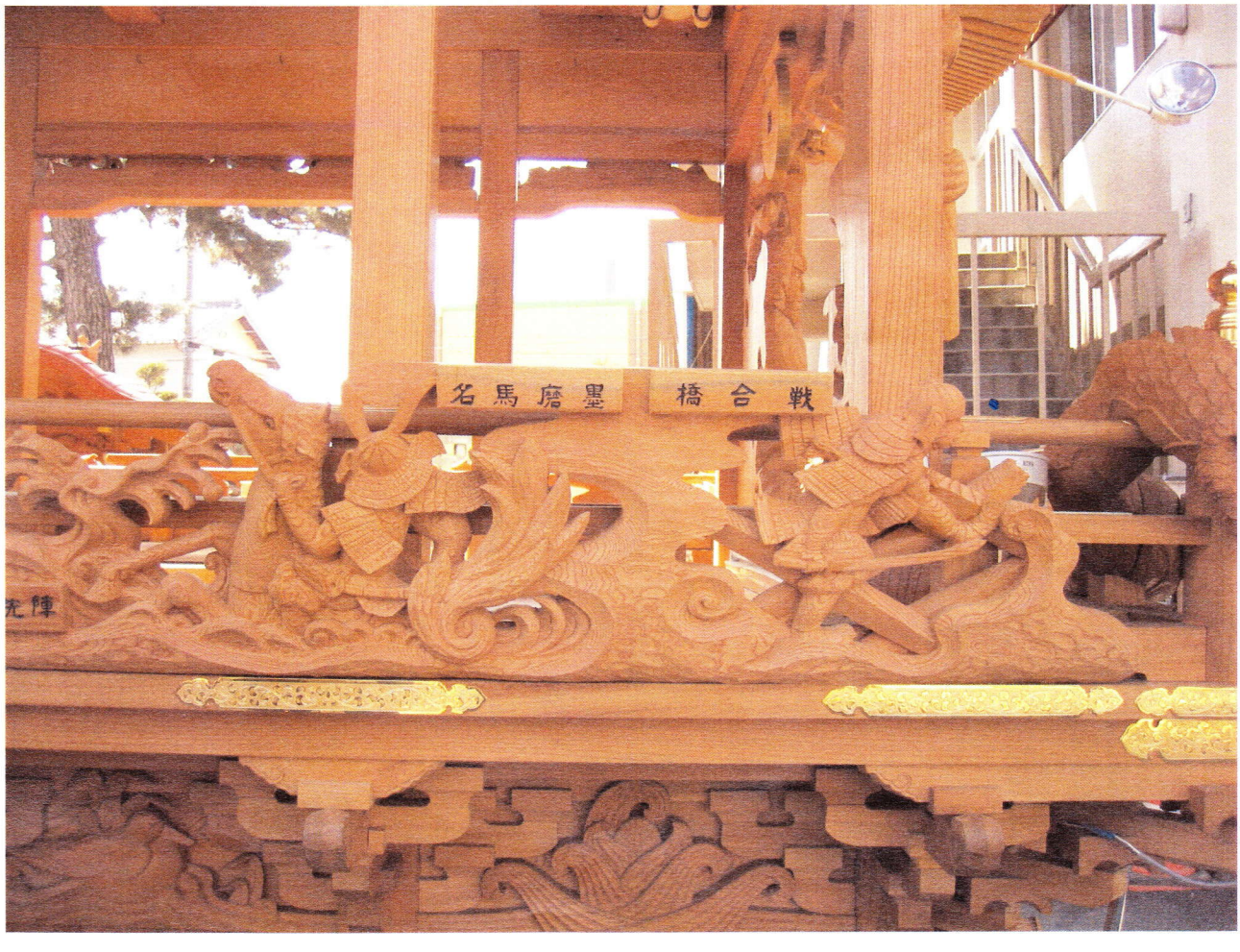
平　清盛をはじめ平家の横暴ぶりに、源　頼政（よりまさ）が高倉宮（たかくらみや）を拝して旗上げしたが敗れて、宇治の平等院に立てこもった。源氏は、増水した宇治川の橋板を外して、平家方を迎え討った。平家方の先陣二百騎余りは、後から後から押し寄せる味方に押されて、増水した川に呑まれ、源氏が有利に見えたものの、平家の大将、足利又太郎忠綱（ただつな）が、三百騎を率いて、敵前を渡河して、源氏方は大きく負けた。

この先続く源平の戦いの端緒である。



名馬 磨墨 （するすみ）

磨墨（するすみ）と云うのは、墨を磨り流した様に毛色が黒いというので、その名を付けました。生食（いけづけ）と並び称される名馬でやはり頼朝の馬でした。梶原源太影季（かげすえ）は、普段から頼朝にかわいがられていたので、宇治川を攻めるに当り生食を所望したのですが、頼朝から与えられた馬は、磨墨でした。

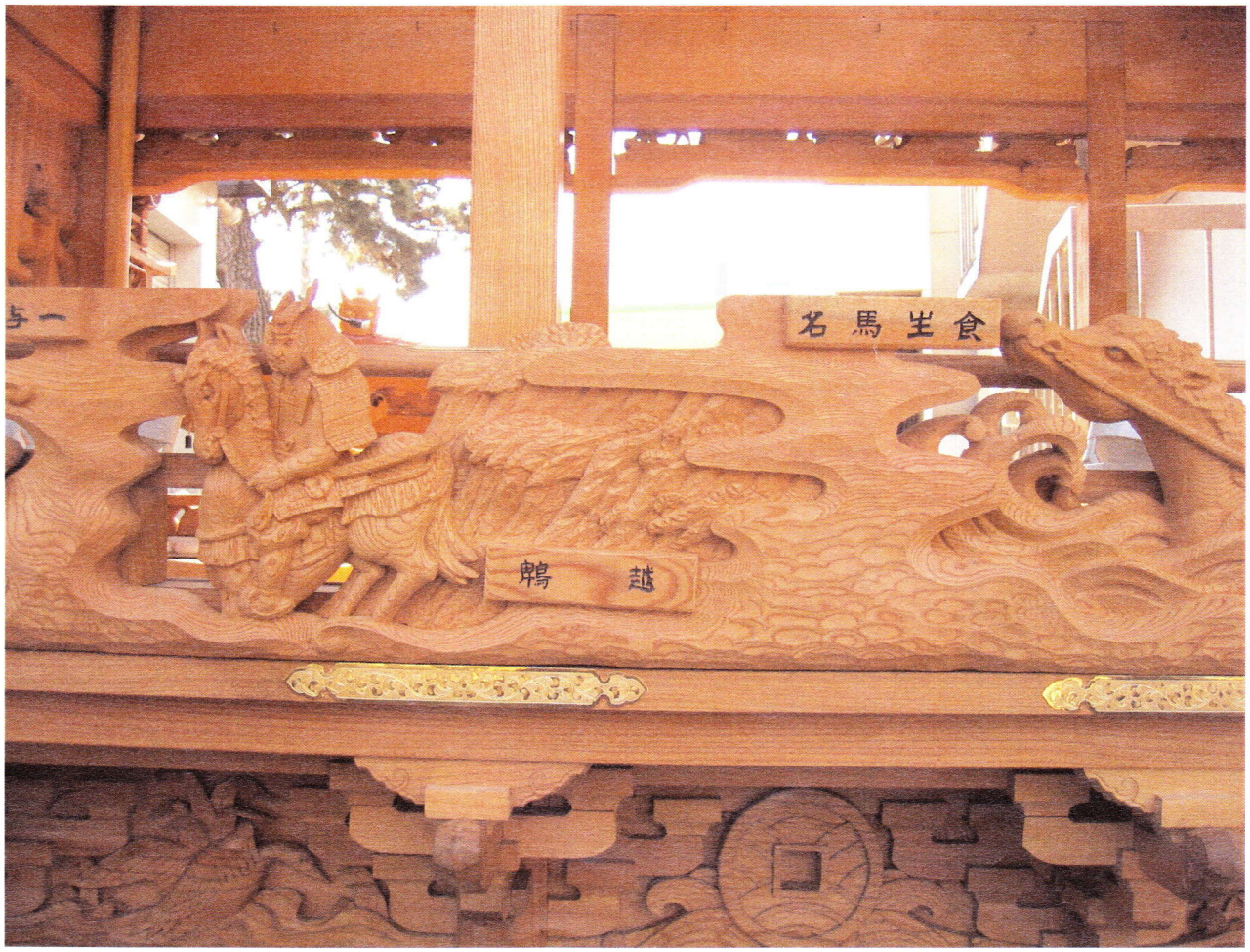


宇治川之先陣

先に都に入った旭将軍木曽義仲（よしなか）が京都で乱暴をはたらいて居る、義仲を征伐せよと云う法皇からの院宣（いんぜん）が、鎌倉の源　頼朝の所に届きました。頼朝（よりとも）は弟の源　範頼（のりより）と義経を大将にして、六万騎の軍を都に攻め上らせます。都に攻め入るには勢多川を渡るか、宇治川を渡るか、二つしか有りません。義経は宇治川を渡って攻め込む事になりました。寿永三年の一月二十日、白い馬の武者佐々木四郎高綱（たかつな）と黒い馬の梶原源太影季（かげすえ）が宇治川の戦いで高綱が先陣をとりました。

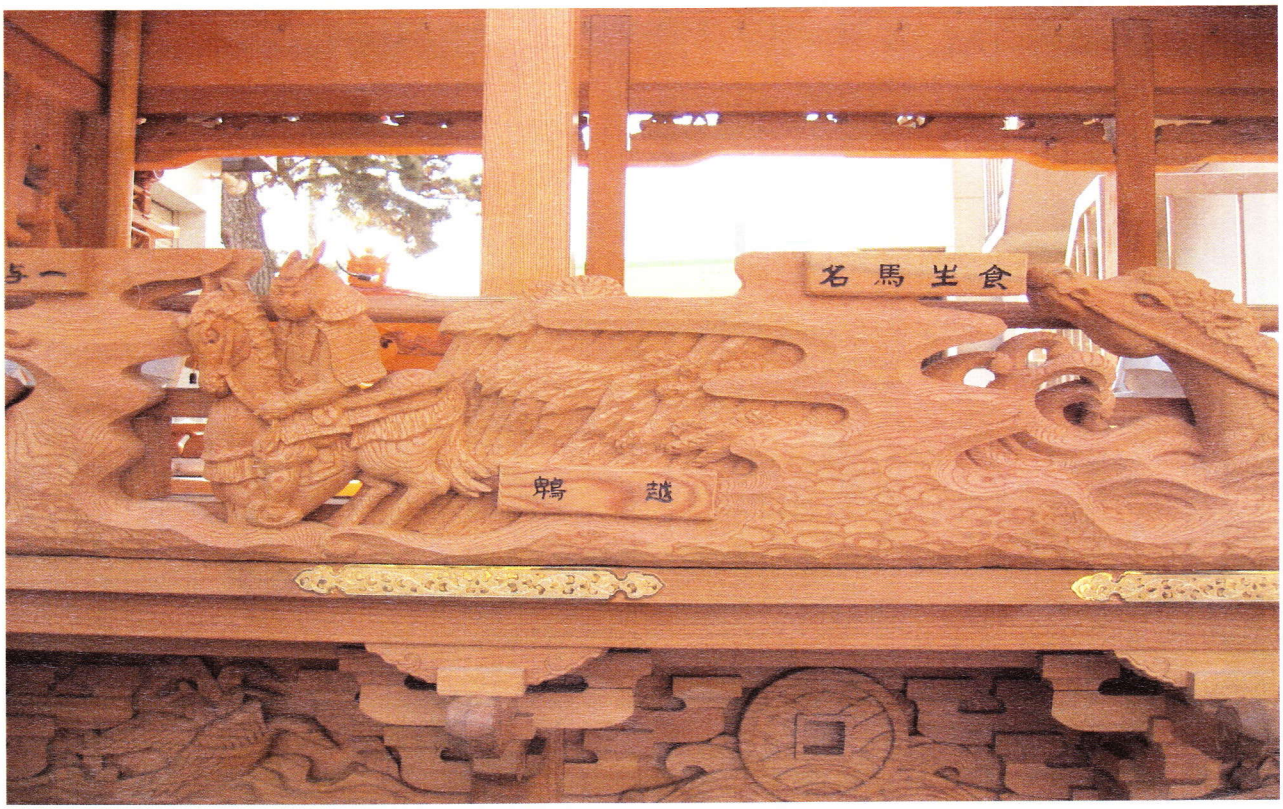
名馬 生食 （いけづき）

生食（いけづき）と云うのはまっ白な馬で、人でも馬でも傍に寄る者を噛み殺すほど強いという事で、生食（いけづき）と云う名が付きました、 元々、源 頼朝の馬ですが、 近江の国の住人佐々木四郎高綱（たかつな）が、わざわざ鎌倉の頼朝の所へ行き願い出て手に入れました。高綱は此の馬で宇治川の先陣を果たしました。



鵯　越（ひよどりごえ）

平家は、屋島を出て摂津（せっつ：今の大阪）の福原を根城にして東は生田の森、西は一ノ谷に陣をかまえました。山に囲まれて前は海と云う要害です。源　範頼（のりより）は、大手の生田の森から源　義経は搦手（からめて）の一ノ谷から此を攻めます。義経は鵯越（ひよどりごえ）の山に向いますが、大変けわしい崖です。ところが、土地の猟師は鹿も通ると云いました。「鹿も四足、馬も四足だ。鹿の通れる所なら馬も通れるはずだ。」と決断した義経は、一気に崖を下りて平家の後方をつき平家は敗れて再び、海に逃げます。

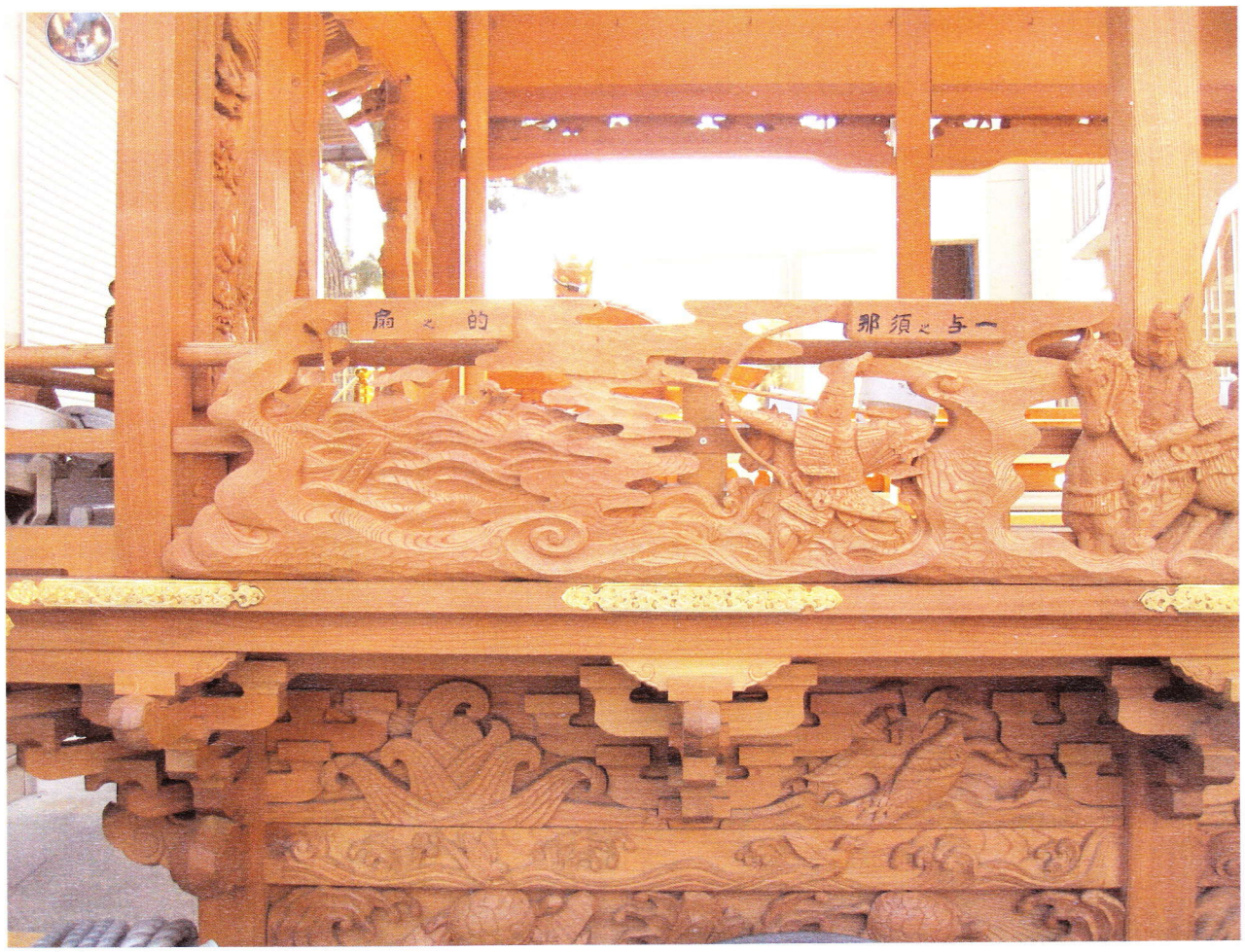


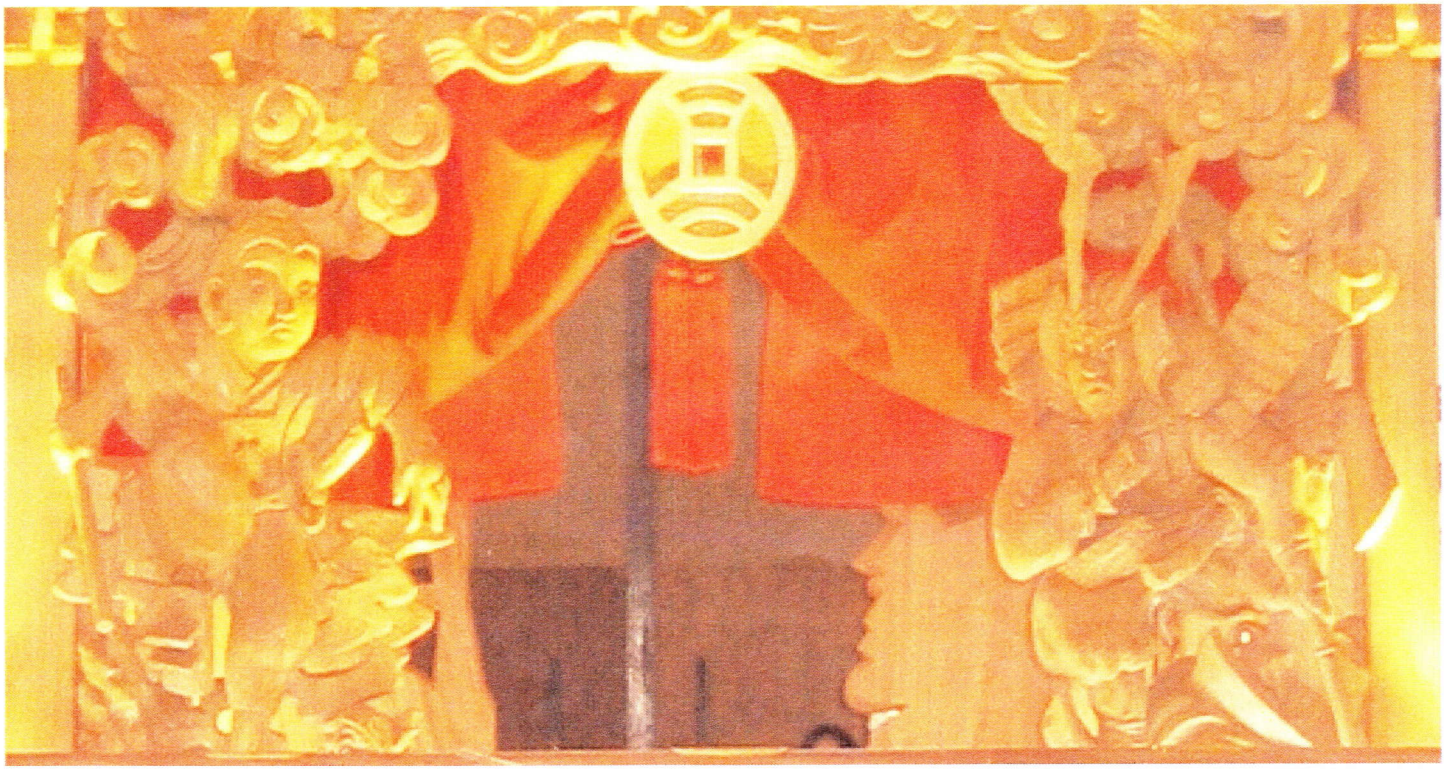
那須之与一

扇の的を見た義経は、下野（しもつけ）の国の住人那須之太郎資高（すけたか）の子、与一宗高（よいちむねたか）に指名して扇を射ち抜くよう命じた。与一は、黒い馬にまたがり海の中に乗り入れて行き、二月十八日の夕方五時頃と云われています。そうして与一は見事、扇の的を射ち抜きました。

扇の的

一ノ谷を追われて平家は、讃岐（さぬき）の屋島に渡りさらに舟で沖へ逃げます。日も暮れかけて、双方休戦かと云う時、平家側より一艘の小舟が扇の的を立てて挑発してきました。





泉町
泉町